

Ol gamal ly of Cinder

BBBs

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

死は終わりではない

始まりであり、失うことである

灰ではない灰となつた者

彼女にその救いは、始めから存在しなかつたのだろう

真  
偽  
存  
在  
歸  
還

目

次

16 8 1



# 帰還

悲しみがあつた、仲間と思っていた人物の裏切り。

それに伴いカルデアスタッフの過半数が死に、所長のオルガマリーもカルデアスに放り込まれ分子レベルで分解されて消えてしまった。

それでも何とか、崩壊する特異点Fから奇跡的とも言える帰還を果たした人類最後のマスター。

しかしながら無事に戻つてこれても問題は山積み、今や人理継続保障機関フイニス・カルデアは機能不全一歩手前にまで落ち込んでいた。

それでもなんとかしなければならない、そうしなければ人類は完全に滅びてしまう。

何者かによつて行われた人理焼却を防ぎ修復するために、またはその何者かを打倒するためカルデアは無理やり動いていた。

施設の修繕を開始し、何とか稼働させられる目処が立ち、その間のマスターの休息を経て、人理修復のための戦力を増強を図ることになった。

守護英靈召喚システム・フェイントを用いり、人類最後のマスターと呼び出される英靈の合意の元、カルデアにサーヴァントたちが降り立つ。

「おつと、今回はキヤスターでの現界ときたか。　ああ、あんたらか。　前に会つたな」  
特異点Fで出会い協力したサーヴァント、キヤスターのクー・フーリン。

「召喚に応じ参上した。　貴様が私のマスターという奴か？」

特異点Fで立ち塞がつたサーヴァント、セイバーのアルトリア・ペンドラゴン「オルタ」。

ちよつとした静いが起こりそうになつたが、協力していくことを前提で召喚に応じたために場は収まつた。

人類最後のマスターである藤丸 立香、そのマスターを守るシールダーのマシユ・キリエライト。

近接戦では無類の強さを誇るだろうセイバーのアルトリア、ルーン魔術の汎用性から火力役も支援役もそつなくこなせるキヤスターのクー・フーリン。

なかなかバランスの取れた編成、戦力的にも問題が無い様にみえるが、待つたをかけるのは医療部門トップであり、所長代行を行うロマニ・アーキマンだつた。

マシユはともかく、クー・フーリンとアルトリア・ペンドラゴンは人類史上に名を残す偉大な英雄たちではあるが絶対の存在ではない。

戦闘か或いは他の事情で戦線離脱となつた際に、送れる代わりの戦力が居ないと立香の危険度が跳ね上がることになる。

カルデアの崩壊もそうではあるが、人類最後のマスターである藤丸 立香が死亡したその時点で人類の滅びが確定してしまうこととなる。

それを避けるためにも、せめて後一体のサーヴァントを予備戦力としてカルデアに置いておこう。

ロマニのその提案に誰も反対はせず、三度英靈召喚の儀が行われた。

マシユの宝具である十字の大楯を置き、システム・フェイトの補助のもとに召喚サークルが起動する。

光が溢れ、青い光輪が大楯の上に並んで広がり、すぐさま縮小して光が一点に集る。

光が実像を結び始める、それだけで立香とマシユの呼吸が止まつた。

「下がれ、マスター」

「ちっ、こいつは何が来やがつたんだ？」

アルトリアは黒き聖剣を、クー・フーリンは杖を取り出して臨戦態勢。

光が人型を結ぶに連れて場を満たすのは濃密な神祕、誰もが意識せざるを得ない圧力。

光が收まり、大楯の上から下りたのは酷くすんで解れも見える黒いローブの、フードを目深く被った存在。

長い袖から見える手も硬質さを感じさせる籠手を着け、唯一見える肌はフードから覗

く口元だけ。

その肌は生氣の感じられない白さ、唇も色を無くしたように薄い。

「答える、何者だ」

アルトリアが威圧的に言う、それも当然で二体のサーヴァントが武器を取り出したよう、呼び出された存在も武器を取り出していたから。

右手には刺剣を、左手には長めの杖を持ち、戦うための準備を整えていたから。緊張した場面、一触即発の空気、今にもアルトリアが斬りかかり、クー・フーリンが魔術を放つても何らおかしくない。

『待つて！ 待つてくれ！』

それを止めるのはやはりロマニだつた。

『召喚は双方の合意時のみ召喚されるんだ！ 初めから敵対的だつたりすると呼び出せないんだ！』

カルデアの敵ならばシステム・フェイトが初めから除外する、それを前提としたものであるためにロープ姿のサーヴァントは本質的には敵でないはず。

それを説明したロマニは二人を止めて武器を下ろさせ、改めてロープ姿のサーヴァントに向かって話しかけた。

『はじめまして、僕はロマニ・アーキマンと申します。 姿を見せず声のみで大変の失礼

かと思われますが、何卒ご容赦の程を申し上げます』

尊敬と畏怖を持つてロマニは語り掛ける。

『我々は意図して敵対する気はなく、行き違いの争いを無くすために、相互理解のための話し合いを望んでいます』

そう話すロマニではあるが、ローブ姿のサーヴァントは話を聞いている素振りを見せずにアルトリアとクー・フーリンに警戒を払っていた。

『……あの、御身がどこの英靈かは存じませんので、真名をお聞かせいただきたいと……』

あれ、これ無視されているんじゃ……と凹み掛けていたロマニではあつたが、二人が武器を下ろしていたためかゆつくりとではあるが武器を下ろした謎のサーヴァント。

「…………」

話してくれる気になつたかと待つていても、一向に口を開く気配すらない様子。

『……真名を聞かせる危険性は重々理解しております』

多くの英靈たちのそれぞれの逸話には、その殆どに死因が載つている。

言わば弱点だ、それを突かれれば如何なる強力な英靈でもあつさりと打倒されかねない。

敗北することが確定する英靈なら尚の事、なんとしても知られることを避けたいだろ

う真名。

真名を教えてくれない理由はそれに因んでいるからだろう、どうしても教えたくない  
というなら仕方がないと別の切り口を掛けようとしてロマニは止まつた。  
「……」

その理由は、ローブ姿のサーヴアントが小さく口を開いてすぐに閉じたため。

教えてくれる気があるのか？ と待つているとまた口を開いて閉じた。

何度もそれを繰り返す、声が小さくて聞き取れないのかと集音をかけるも発声 자체を行つていいない。

もしかすると何らかの呪いでも掛けられて、自身の真名を喋れないのでないかと推測。

『……何らかの事情で真名を話せないのでしたら仕方がありません、こちらからは聞かないように致します』

代わりと言つては何だが、フードの下にある顔を見せては貰えませんかとロマニ。

それに対してフードの下で首を軽く横に振るサーヴアント、ゆつくりと右手をフードに掛けて脱ぐ。

「……私の、名前は」

フードの下から露わになる素顔、それを見てロマニは驚愕のあまり完全に停止した。

「……オルガマリー」

何故ならばその姿は分子レベルで分解されて消えたはずの、オルガマリー・アニムス  
フィアその人であつたからだつた。

# 存在

彼女にとつて生きることは地獄であった。

しかしその地獄の始まりは、疾うに記憶の中から無くなっていた。

思うことは死にたくないと言う事だった。

それはいつしかどうでも良くなっていた。

忘れ去られた記憶の中、残るものは数少ない。

それを失う恐怖が、生き続ける毎に肥大化していく。

だが、それすらも忘れ去ろうとしていた。

残るもの、残っていたもの、摩耗し続ける今に有るのは成り果てる恐怖のみ。

彼女はそれを恐れ、僅かに残る自分をかき集めることしかできなかつた。

『……マリー？』

フードを取つた存在、ロマニからマリーと呼ばれたオルガマリー・アニムスファイア。

くすんだ髪色、生氣のない肌、瞳は濁っているように見える。

服装も相まって、カルデアスに落とされる前の姿とは全く違う印象を与える。

『え、マリーなのかい？ ちょ、ちょっと、今そつちに行きますから！』

ガタガタと何かが倒れる音を鳴らして、ロマニの声が途切れる。

「……おいおい、何がどうなつたらそうなるんだよ」

ロマニの慌てた声など耳に入らず険しい表情のまま言うのはクー・フーリン、カルデアに召喚される前に特異点Fで出会っているためにその変貌に声を漏らした。

生氣はないが姿形はまさしく特異点Fで出会ったオルガマリー・アニムスフィアそのもの、だからこそ同一人物には見えないその変質。

正直に言つて、それなりの才能は感じさせるが英靈に到れるほどではないと断言できる程度の存在であつたはず。

だと言うのにブリテンの騎士王とアイルランドの光の御子をして、警戒させる気配を放つオルガマリー。

「貴様は何だ？」

黒き聖剣の切つ先を下げてはいるが、僅かにも警戒心を緩めること無くアルトリアが問う。

アルトリアも特異点Fでオルガマリーを見た、有るのはクー・フーリンと同じような

感想。

だからこそ殺意をむき出しにして、オルガマリーもどきを見据える。

「……何、とは？」

「そのままの意味だ、貴様はあの小娘とは違う」

特異点Fのオルガマリーと、今日の前にいる呼び出されたオルガマリーと名乗った者は別人だ。

同一人物とは到底認められない、ほぼ間違いなく根底から違う存在と言つていい。

それを指摘するも、返つてくるのは同じもの。

「私は、オルガマリーよ」

「話しにならんな」

アルトリアが聖剣の切つ先を上げる、この存在は己と同じかそれ以上にまともな者ではあるまいと断じての行動。

「おいセイバー、少しくらい待つてつて

ちらりと背後を見るクー・フーリン、そこには神秘の圧力で顔面蒼白で固まっている二人。

「少しばかり魔術を使うがよ、後ろの二人を気付けるもんでお前さんに使うもんじやないから勘違いしないでくれよ」

念を押してオルガマリーに言う、もし戦闘になつてしまえば背後の二人を庇いきれるかわからない。

取り出している武器からそれなりの近接戦から魔術も行使できるだろうと推察、戦闘の可能性を考えれば自身が信頼する物を使うのは戦士としての常だ。

近接戦でセイバーを抑えられるかもしれないし、キヤスターとして破滅的な魔術を放てるかもしれない。

両方なら最悪、片方でも面倒くさいことになるとクー・フーリン。

「ほら、しつかりしろ」

クー・フーリンが杖を軽く振り、ルーン文字が浮かび上がつて光が二人を包む。

心神喪失とも言える二人が思い出したように大きく息を吸つて咳き込む。

「……おい、まじで止めとけって」

クー・フーリンは前に出て杖をアルトリアの前に置く。

「止めるなランサー」

「今はキヤスターだつての。 つーかよ、今ここでやりあつたらマスターが死んじまうかも知れねえだろうが、少しは落ち着け」

そうクー・フーリンは言つてはみるものの、今のアルトリアが感じているものを共有していた。

不愉快とまでは行かないが、このオルガマリーを見ていれば危機感が過るのだ。

この反転した騎士王はどうも本能の部分が強いようで、より強く感じ取つてているのだろう。

仮にこのオルガマリーが本物であつたとして、ここまで変質する何かがあつたのは簡単に予想できる。

問題はその変質する何かがどういう物かわからないこと、それまでの境遇か、或いは英雄に付き物の呪いでも受けたのか。

何にせよこのオルガマリーにとつて良くないものであつたのは違いない、もし本人であれば恐らくはもう戻れない所まで来ているとクー・フーリンは半ば確信していた。

それからクー・フーリンがやるやらないと逸るアルトリアを抑え、ならばまず貴様からと敵意が向いて、なんでだよと呆れていた所にロマニが駆け込んできた。

「マリー！」

ばたばたと形振り構わずといった様子のロマニ。

「マスターたちがやっぱそなんで下げとくわ。 セイバー、すぐ戻つてくるからその軟弱男をしつかり守つとけよ」

未だ苦しそうな二人を部屋から押し出すクー・フーリン、それにふんと鼻を鳴らして返すアルトリア。

「マリー、本当に君なのかい……？」

半信半疑で問い合わせるロマニ。

「……私はオルガマリーよ」

「どうだかな」

繰り返すオルガマリーに、信じていないアルトリア。

容姿が似て声も似る、だが偽る手段が幾らでもあるのがこの世界。

「……君がオルガマリーであると主張するなら、こちらに証明する手段がある」

その偽りを成させないために、このファニース・カルデアに魔術的、科学的な認証システムを導入している。

基本情報として塩基配列から靈器属性、その他色々な極めて変化しづらい情報を登録し、照合して全て一致した時に本人であると認められる。

それを用いてオルガマリー本人であるかどうか決めようとロマニ、所長であつたオルガマリー・アニムスフィアも当然登録してあるためにそれと照会しようと提案した。

本人かどうか決めるのはこれが一番時間が掛からず、確実であると説明。

拒否するのであれば、オルガマリー自身がオルガマリーであることを証明できるもの

を提示しなければならない。

そう説明したところ、少々間を置いてオルガマリーは承諾した。

「塩基配列は不明、靈器属性は中立・中庸、照会して一致したのは約五割。どちらかと言えばサーヴァントに近いが恐らくサーヴァントではない、果たして彼女は本当にオルガマリー・アニムスファイアなのだろうか?」

頃垂れていたロマニに声を掛けるのはカルデア技術部トップのレオナルド・ダ・ヴィンチ。

オルガマリーと名乗った存在の情報と、カルデアに登録されているオルガマリー・アニムスファイアの情報をすりあわせての結果。

登録情報と一致した割合が低ければ偽物、高ければ本物と言えたが結果は半々とどつち付かず。

オルガマリーと言えるし、オルガマリーとも言えない、どっちにも取れる結果だ。

「それでどうする気だい、ロマン? 修復すべき特異点も見つかって、これから激動となっていく。

カルデアの人間でも、召喚されたサーヴァントでもない、どっち付かずの正体不明を

置いておく事はとつても難しいよ。

彼女の処遇を決めるのはこのカルデアの誰でもない、ロマニ・アーキマンが決めることだよ。

……重たいかい？ 苦しいかい？ だけど、人類最後のマスターはもつと重いものを背負うんだ。

それを理解している君なら、きっと逃げ出さないと思つてゐるよ』

そう、レオナルド・ダ・ヴィンチは真剣な表情でロマニ・アーキマンへと告げた。

# 真偽

第一特異点へのレイシフト前のブリーフィングで、ロマニはオルガマリーと名乗った存在のわかつたことを立香やマシユなどに話した。

一つ、彼女は恐らく人間ではなくサーヴァントと似た存在であること。

二つ、彼女自身かなり記憶が曖昧なこと。

三つ、彼女はカルデアに協力する意志があること。

ロマニはアルトリア監視の下、オルガマリーとの会話を試みた。

ロマニが何かを聞くと、『わからない』『知らない』『覚えていない』の三つが殆どの有様。

会話はするが何も話したくない、そう受け取っても仕方がない話。

実際アルトリアは『どうか、よし死ね』と猛り、必死のクー・フーリンに止められていた。

「ドクター、サーヴァントと似た存在、と言うのはどういう事でしょうか?」  
押し問答しているサーヴァント二体をよそに、マシユが質問を投げかける。

「ああ、それはね、カルデアが想定しているサーヴァントと違うからだよ」

本来呼び出されたサーヴァントは自身での魔力生成を行えないため、魔力供給が無ければ魔力切れで消滅する。

それを前提として通常の聖杯戦争で呼び出されるサーヴァントは、マスターからの魔力供給で存在を維持する。

ここカルデアではマスターからの供給ではなく、特殊な方法を用いて魔力をサーヴァントへと振り分けている。

アルトリアたちはその魔力を持つて実体化しているのだが、彼女にはカルデアから魔力を一切供給していない。

確かにフェイトを介してカルデアに呼び出されたが、システムが彼女をサーヴァントとは認めていない。

「彼女は他の力を使わず自力で実体を維持しているんだ、呼び出されたその瞬間は靈体であつたことは確認できているけど、どうやつて実体化しているのか判別できなかつた」

彼女の状態は現在不明であり、魔力を使つて実体化しているのか、あるいは他のエネルギーを使つているのか。

少なくともカルデアのシステムが観測できない何らかの力を使つていると思われる。

「未知の力、ですか」

「恐らくね、従来のそれとはまた別の法則の可能性が高い。もしかしたら過去に存在した、或いは未来のものなのかもしれない」

遥か過去の神代から現在に至るまで、伝わらなかつたものが多くあり、西暦に移行して新たに見つかつたものも多くある。

単純に知識などの形で伝わらなかつたものから、法則の違いから伝えられなかつたものもあつただろう。

彼女が実体化している術は伝わらなかつたもので構成されている可能性もある。

さらには現在のカルデアは時間軸から外れているため、未来の法則である可能性も否定できない。

なんにしても彼女の実体化はどうやつてしているのかわからないと言うことがわかつた。

「……もう行つていると思われますが、どうして実体化出来てているのか直接聞いてみては？」

「……その事なんだけど、恐らく彼女が認識出来ていることはかなり少ないとと思う

二つ目のこと、彼女の記憶について。

「色々聞いてみただけど、全部が曖昧なことしか返つてこなかつたんだ」

『わからない』、『知らない』、『覚えていない』。

不信を呼ぶ言葉ばかり、どこから来たのか、どうしてそんな風になつたのか、それらの質問に明確な返事を返さない。

「その……、彼女自身が不明瞭な感じを受けるんだ。例えば彼女の名前はオルガマリーなんだけど、ラストネームであるアニムスファイアでは反応しないんだ」

「反応しない、ですか？」

「うん、オルガマリーやマリーと呼べば反応してくれるんだけど、彼女の一部であるはずのアニムスファイアや彼女のことを示す所長と呼んでも自分の事だと認識していないようなんだ」

名前やその愛称を呼べば反応する、だがその他の彼女を示す名称には反応しない。

その他会話をしながら、ロマニは彼女の反応を見ていた。

医療部門のトップであるロマニは肉体の治療は当然ながら、メンタルのケア方法も学んでいる。

それに照らし合わせて観察した結果、PTSD、心的外傷後ストレス障害の可能性が見えてきた。

時間があれば詳しく調べるしメンタルケアもするが、残念ながら今のカルデアに悠長にしていられる時間はない。

とりあえず確かめてみるといい、そうロマニは彼女のことを呼んでみることを勧めた。

それに従いマシユは所長と、立香はアニムスフイアと彼女を見て呼んでみるが無反応。

続いてオルガマリー、マリー所長と呼べば二人に視線を向け。

「なにかしら」

一度立香とマシユは顔を見合させて彼女を見た。

「貴女は本当にオルガマリー所長なのですか？」

『『しょちよう』』と言うのはわからないけど、私はオルガマリーよ』

オルガマリーかと聞けばそうだと返つてくるが、オルガマリー本人かどうかの質問をすれば不明瞭な答えが返つてくる。

さらにはオルガマリーであることを主張しているが、アニムスフイアであることは主張しない。

それどころかアニムスフイアという言葉がどういった意味を持つか理解していないようにも見える。

それそのものが欠けているような、知つて当然の知識や常識をまるまる無くしてい るような素振りだ。

そんな問題だらけと言うか、問題しかない彼女ではあるが、とくに敵対的ではないのもまた問題だった。

それどころか協力する意志すら見せており、しかもその理由はただ『呼ばれた』から。人理修復とか人類絶滅とか外の世界は滅びていると言つても『……そう』で終わらせ、とくに感慨を見せない。

これがレフ・ライノールのように明確な敵意の一つでも見せてくれれば即座に排除を選ぶのだが、トロマニはため息を吐く。

「……本当に勧められたことじやないけど」

フェイイトの機能を信じ、戦力として彼女を運用する。

当然彼女を信用する材料は揃っていない、実際賭けのようなものだ。正直言つてここでは決められない、だから第一特異点に送るのだ。  
彼女が味方でなかつた時のために。

「……立香君、マシユ、くれぐれも気をつけて欲しい」

そうして多くの問題を抱えながら、人類最後のマスターとそのサーヴァントたちは時を遡つて降り立つ。

西暦1431年、フランスのオルレアン。

その地にて、グランドオーダーの実証が始まつた。